

# 幼児教育の「見方・考え方」を保障する保育環境の検討

## Study of educational environment to improve manipulation and thinking in early childhood education

坪 井 貴 子

Takako TSUBOI

### はじめに

佐々木（2018）は、著書の中で、4歳女兒が、苺のプランターの中でナメクジを見つけて、それを殻をなくしたカタツムリだと思い心を痛めて殻を探している事例を紹介している。筆者も子どもの同じような思い違いを目にしたことがある。ある小学校の生活科の時間に、1年生が校庭散歩に出かけ、それぞれ校庭で見つけた植物などを手に教室に戻ってきた。ある男児はカタツムリを見つけて教室に持ち帰ったが、教室に戻った頃にはカタツムリが殻の奥に入ってしまった。カタツムリの姿が見えなくなったことを、その男児はカタツムリが殻から落ちたか逃げ出したと思い、もう少しで校庭に取って返していなくなったカタツムリを探しに行くところであった。

どちらも、子どもにありがちな思い違いである。子どもたちを弁護するならば、ヤドカリは貝殻を取り換えるのだから、カタツムリが殻を脱ぐことができると考えるのも無理からぬことかもしれない。そして、カタツムリとナメクジは、白い跡をつけて進むところも見た目も似ているのだから、ナメクジを殻のないカタツムリだと思ったとしても無理もないのかもしれない。

このように、子どもたちは、それまでの生活経験の中で得た知識などを、未知のものに

も応用して類推したり考えたりするのであるが、往々にして上のような子どもらしい間違いを起こす。これらは、ある意味、子どもならではの「見方・考え方」の結果と言えるかもしれない。

このような思い違いが、発達上プラスになるかどうかは不明であるが、願わくは、間違いを恥ずかしいと思わせず、これを契機に調べる活動などに結び付けることができれば、間違いも大いに役に立つものとなるであろう。そうなるための、教師の援助に期待したい。

ところで、平成29年3月告示の幼稚園教育要領には、「幼児期の教育における『見方・考え方』」という文言がある。これは、上で述べた、いわゆる子どもらしいものの「見方・考え方」とは異なる。

そこで、本論では、幼稚園教育要領で言うところの「見方・考え方」を、まず理論上明らかにし、それに該当する観察事例を取り上げ、そこから、幼児教育における「見方・考え方」を保障する保育環境はどのようにあるべきかを考えていきたい。

### 1. 幼稚園教育要領における「見方・考え方」

『幼稚園教育要領』第1章総則、第1幼稚園教育の基本」の中で、幼児期の教育は環境を

通して行うものであることを基本とするとし、このために「教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」と記載されている。

### （1）中央教育審議会答申の考え

平成28年12月に出された「中央教育審議会答申」によると、「幼児教育における『見方・考え方』」について次のように述べてある。

○幼児期は、幼児一人一人が異なる家庭環境や生活経験の中で、自分が親しんだ具体的なものを手がかりにして、自分自身のイメージを形成し、それに基づいて物事を感じ取ったり気付いたりする時期であることから、「見方・考え方」を働かせた学びについても園生活全体を通して、一人一人の違いを受け止めていくことが大切である。

○幼児教育における「見方・考え方」は、幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね、遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思い巡らしたりすることであると整理できる。

○このような「見方・考え方」は、遊びや生活の中で幼児理解に基づいて教員による意図的、計画的な環境の構成の下で、教員や友だちと関わり、様々な体験を通して広がったり、深まったりして、豊かで確かなものとなっていくものである。こういった「見方・考え方」を働かせることが、幼稚園などにおける学びの中心として

の重要なものである。

○このような「見方・考え方」は、小学校以降において、各教科等の「見方・考え方」の基礎となるものである。

### （2）無藤（2018）による解説

無藤（2018）は「見方・考え方」について中央教育審議会答申に基づき具体的に次のように述べている。「たとえば、ある子どもが『コップを棒でたたくと音がする』と気づく。そしてあれこれたたいているうちに『コップの水の量が変わると音も変わる』と知り、『もっといい音を出すにはどうすればいいだろう』と試行錯誤し、思いめぐらす。そのように身近な経験から何か意味を見出したり、規則性を発見したりしていく。そうした子どもたちのあり方を大切にしていくのが、幼児教育の本質ということです。（中略）そして、この『見方・考え方』を取り入れること＝『学び』と考えます。ここでの学びとは、小学校教育を先取りすることではなく、子どもが身の回りのものや人に関わり、さまざまな意味や規則性を見つける過程で生まれる、気づき・発見・考え方や態度の変化などを指します」としている。

また、「見方・考え方」と「資質・能力の3つの柱」との関係について、無藤（2018）は、「資質・能力の3つの柱」は「見方・考え方」を子どもにおいて育てるべき力として捉え、具体的に次のように説明している。

「知識及び技能の基礎」について、「コップの音の例でいえば、たたき方によっても、たたく物によって音が違う。これは1つの気づき、発見です。また、コップをたたいて演奏ができるようになれば、『できるようになる』という技能になります」と述べている。次に、「思考力、判断力、表現力等の基礎」については、「試し、工夫すること、考えること」

とし、「たたいたらいろいろな音が出る。高い音や低い音、大きい音、美しい音にするにはどうすればいいかを考える。そうした頭を使う活動が工夫、表現、思考力の基礎を育てます」と述べている。次に、「学びに向かう、人間性等」については、「これは、5領域で従来から言われている心情、意欲、態度」であり、幼児期は、やりたくなる意欲をもち、やり始めたらがんばってやり遂げることが重要であり、こうしたことが就学後の「学びに向かう力」になると述べている。そして、こうした力が「非認知的能力」や「社会情動的スキル」と表現されると説明を加えている。

つまり、幼児期の教育における「見方・考え方」を具体的に表したものが「資質・能力」の3つの柱であり、「見方・考え方」を取り入れることが幼児の学びと言える。

そこで、次の2、3では、「見方・考え方」を取り入れた実際の観察事例（筆者が参観して記録したもの）を取り上げ、後段で考察を試みることにする。

## 2. 砂場での遊びや泥を使った遊びにみる

### 「見方・考え方」

#### (1)「知識及び技能の基礎」を育む

##### 事例1 砂の特性を発見する

A幼稚園 3歳児 2019年1月11日

この日は、泥団子名人を招いて、クラス全員で泥団子作りを行った。子どもたちは、園庭で思い思いに泥団子作りを行った。泥団子作りではなく、さら粉集めに余念がない人たちもいた。

さら粉を集めていた3人のさらこな職人は、徐々にストーリーができてきたのか、「さら粉屋さん」など言っている。そして、さら粉の入っているボウルの底

を近くにあった台に10数えながらどんどん当てている。10数えてはしばらく休み、また10数えながら当ててということは何回か繰り返していた。途中、英語で10数えたりもしている。そうしたところ、最初はボウルの中でふわふわな感触だったさら粉が、触ると硬くなっていることを発見した。そのことを担任の先生に知らせると、先生が「なんでかたかたになるんだろうね。ふわふわだったのに」と不思議そうに応じた。

帰りの集まりの時に、1つの班がその日自分が遊んだことなどを紹介するのだが、この日紹介することになっていた班の一人の女兒が、上のさら粉が硬くなった体験を紹介した。

担任の先生は、口頭での説明だけでは子どもたちがわかりにくいと思われたようで、さら粉とボウルを保育室に持ってきて、子どもたちが行っていたように、床にボウルを10数えながらどんどん当てて、しばらく休むというやり方を実演して、砂が硬くなったことを紹介した。

##### 事例2 水や道具の特性を知るために試す

B幼稚園 3歳児 2019年3月12日

6人ぐらいの男児たちが砂場で遊んでいた。そのうちの2人が、砂場の横にある手洗いの水道から砂場まで、竹の長い樋を斜めに立てかけて遊んでいた。樋の上に、塩化ビニル製の筒を置き、水を「流してみようか」と言って水を流し始め、水が筒に入るところで、縁に当たって渦のようになるのを熱心に見ていた。次に、筒を樋の上で蛇口寄り（上の方）に移

動させた。今度は小さいスコップで樋の上の方から砂を流した。砂を流した男児は、砂を流した後に、砂が流れたかを樋の下の方から覗き込んで確認しようとしたが、砂はすでに流れた後だった。その次は、樋の上の筒を2つにして、さらに細い筒も最初の太い筒の内側に入れてみた。そこに、今度は水道ではなく、じょうろで水を流した。2人の男児は2つの樋の場所を調節し、一人の男児が樋の下から中を覗いた。

してその上にのせた竹の樋を支え、2本目の塩化ビニルの樋をつなげた。（樋を2本繋げようとする、1本の時と傾斜の角度が変わるので、樋を支えるために、砂場に筒を刺して、その上に樋を置き、樋を支えるようにした）。

次に、男児は、樋を直角につなぐ部品を見つけて、それをつなぎたいようだった。最初、水道の下にそれを直接持って行って、その直角につなぐ部品の上でどのように水が流れるかを見ていた。水の流れの何らかの変化に気づいたようだ。それを竹の樋のスタート地点につなぎたいと先生に伝えたところ、先生からその部品は竹の樋とつながっている塩化ビニルの方の樋でなければつながらないことを教えもらい、さらに2本の樋のつなぎ目ではなく塩化ビニルの樋の先の部分につけることを勧められた。

樋のつなぎ目が壊れた。男児は、樋を直角につなぐ部品を塩化ビニルの樋につけて、それを水道のところに持って行った。男児は、手洗い場の使っていない水道（一つの水道の下には、竹の樋が置いてあるので、反対側の水道）の下に、樋の直角につなぐ部品をつけた側を水道の下にして樋を置いた。樋の方向は流しと平行にし、流しの縁が邪魔をして、樋は水道の下が低くなり、樋の先が高くなった。このため、思ったように水が流れなかったようだ。そこで、おそらく水が流れるようにしようと思ったのであろう、水道の蛇口をひねって水をたくさん出してみた。

### 事例3 水や道具の特性を知る

B幼稚園 3歳児 2019年3月12日

（事例2の続きであるが、事例2に出てきた樋で遊んでいた2名の男児は他へ移り、そこへ別の男児がやってきて、遊びを続けた）。

男児は、最初は平たい四角のプラスチックの入れ物に水道の水を入れて流していた。次に手洗い場の近くに積まれていた樋を1本抱えて持ってきた。これを、水道から砂場にすでに斜めに立てかけられていた竹の樋につなぎたいようであった。そして男児は先生に、「勝手に水が流れるようにしたい」と言った。男児は、すでにあった竹の樋の上に、樋を3つ重ねた。4つ目は別方向に向かせた。そして、男児は、しばらくの間樋に水を流していた。男児は水の流れのスタート地点である樋の上と終わりの地点である樋の下の方を見ていたが、両方いっぺんに気にとめるのは難しそうだった。結局竹の樋の先に2本目の塩化ビニルの樋をつなげた。途中、先生の助けで、筒を砂場に縦に刺

3つの事例は、どれも3歳児の砂や水を使った遊びの事例である。事例1のさら粉に関する発見は偶発的なもののようだ。事例2、3

については、子どもなりに予想している部分もあるようだが、多くの部分は、水の流れがどうなるのかをいろいろ試している場面といえる。3つの事例に共通しているのは、子どもたちはいろいろ試して、いろいろな気づきをしているということである。

## (2)「思考力、判断力、表現力等の基礎」を 育む

事例4 砂のプリンづくり。うまくできる方法を考える。

B幼稚園 3歳児 2019年3月12日

一人の男児が砂場の縁のあたりでバケツのプリン作りを始めた。バケツに自分で砂を入れて、先生に「プリンやって」とお願いした。バケツに砂を入れることは自分でできるが、バケツをひっくり返して空けてプリンを作ることは3歳児にはまだ腕力的に無理であるため、ひっくり返すところからは先生にお願いするというわけである。先生は砂場の縁に積もった砂を手で除けてバケツをひっくり返したが、土が軟らかくてすぐに崩れた。2回目のプリンもうまくできなかった。3回目のプリンの準備ができた。先生がバケツをひっくり返そうとして、別の男児も手伝ったがこれもうまいかなかった。4回目のプリンの時、男児はバケツに砂を詰め終え、「これでどう?」と先生に知らせた。しかし、ひっくり返したら今度も残念ながら崩れた。先生が砂が「やわらかい?」と尋ねたら、男児は、「ゆっくりするんだよ」とバケツの持ち上げ方に注文をつけた。5回目のプリンの方は、バケツを持ち上げる前に、先生がバケツの底をとんとんとたたき、砂が

底からうまく離れるようにしたら、男児が「とんとんしたらだめ」と言って、バケツの外し方にも注文をつけた。6回目は、プリンをひっくり返すのをまた別の男児が手伝った。今度は崩れずできた。男児は、それを見てすかさず「いただきます」と手を合わせた。

この事例では、プリンがうまくできるまでに6回を要した。失敗を繰り返すことで、男児は失敗の原因、逆に言えばうまくいくコツを類推したと言える。

## (3) 砂場での遊びや泥を使った遊びに関する 考察

小川(2007)は砂場での遊びを、「積み上げる一掘る」と「集める一拡散する」という2つの軸で分けられた4つの領域に整理した。

それにより、よく見られる「お団子づくり」や「型ぬき」、「山づくり」「川やダムづくり」などが該当する領域に位置づけられた。

また、砂に関わる活動では、子ども同士のコミュニケーションが比較的少ない点を指摘して、それは砂そのものとコミュニケーションするためではないかと考察している点が興味深い。

前出のA幼稚園の事例は、泥団子名人が子どもたちに泥団子の作り方をレクチャーしてから3歳児クラスの子どもたち全員で泥団子作りに臨んだ時のものである。奇しくも、泥団子名人が泥団子の作り方をレクチャーする際に、「泥とよくお話ししてね」と言った言葉が小川の「砂そのものとコミュニケーションする」という言葉と符合する。砂や泥の遊びでは、手で感じる触感が重要な要素なのかもしれない。このことは、事例1と4にも当てはまるようだ。



事例2と3の水を使った遊びでは、どちらも道具を使っていろいろ試している様子が見えるが、まだ明らかな法則性や因果関係的な発見には至っていないようだ。

### 3. 環境の読み取りと働きかけ方の学習としての片付け

#### 事例5 5歳児の片付け

C 幼稚園 5歳児 2018年5月18日

遊戯室いっぱいに拡げられた大型箱積み木の片付け場面でのこと。子どもたちは先生抜きで自分たちで片付けを始めた。子どもたちの片付けの様子を見ると、大型箱積み木は、積み重ねて置いておく場所の近くから運ぶより、組み合わせたい形のものを選んで運んでいるようだ。また、一人では運べない大きい箱積み木もあるので、それを運ぶときは「誰か手伝って」と他の人に声をかけることができていた。

先生が遊戯室に来て、積み重ねる場所の近くの積み木から運ぶよう伝えた。

#### 事例6 4歳児の片付け

C 幼稚園 4歳児 2019年2月19日

4歳児の保育室で片付けが始まった。遊びでお風呂として使っていた段ボールの浅くて大きい箱をみんなで片付けていた。お神輿を担ぐような調子で、子どもたちはわーわー言いながら運ぼうとしていた。箱の中には、青と水色のスズランテープの小さいぼんぼんが、水の代わりに敷き詰められていた。その段ボールの

お風呂を、大人数で抱えて片付けようとしたが、箱がたわんで壊れた。そこで、箱をいったん保育室の中央に戻して、壊れた部分をガムテープで修理した。箱の修理後、保育室の壁に沿って箱積み木を片付けているところへ、段ボールのお風呂も運んで片付けようとしたが、箱積み木がまだ片付け途中であったため、担任の先生が「またここに戻すと同じようになるんじゃない」と、また壊れるかもしれないということを子どもたちに伝えたため、再度箱を修理した保育室の中央に戻した。この時も、子どもたちはわーわー言いながら戻した。箱を再度修理をする際は、一人がテープを切り、他の子どもたちが切られたテープを一つずつ受け取って貼った。

先生はさらに、「箱積み木を積むばかりでなく、下のまわりのものが踏まれてぺしゃんこになっているから、下から片付けたら」と子どもたちに片付けの順番を示唆した。

ままごとコーナーの絨毯を巻いているところでは、それぞれの端から、畳もうとしている人と巻こうとしている人がいたので、他の人も巻き込んでちょっとした騒動になり、解決のために先生が間に入った。

中には、一人もくもくと片付ける人もいた。ままごとのスカートは、きれいにたたんで引き出しに収納した。

事例5と6は5歳児と4歳児の片付け場面である。まず、事例の文面には表せなかったが、5歳児は片付けに対して自覚的、自主的に取り組めるのに対し、4歳児は片付けも遊びの延長のようであり、すきあらば容易に遊びへ移行してしまいそうな状態であったことが異

なった。それは、4歳児の段ボールのお風呂の運び方を見ても明らかだった。

大型箱積み木の片付け場所は、どこの園でも壁に印の線が引いてあり、その印の高さまでに上手に積み木を組み合わせて積まなければならない。

子どもたちの様子を見てみると、5歳児が片付けに対して自覚的であるとは言っても、まだ段取りが良いとまでは言えない。運んだ積み木に応じて、組み合わせられる次の積み木を手早く探すのではなく、事例にも記載した通り、まず組み合わせられる積み木を探してからそれを片付けるという方法をとっていた。段取りが良く手早くなるためには、経験と回数を積む必要があるようだ。

一方4歳児は、片付けも遊びの延長のようなどころが見られるため、段取りよりも目に着いたものや興味のあるものに目が向くようだ。物に対する働きかけ方が適切でなかったことは、片付けているはずの箱が壊れたり、先生に足元もとから片付けるよう提案されたことから明らかである。また、じゅうたんを巻いた方がよいか、たたんだ方がよいのかは、子どもたちにとって学習の機会になり得る場面と言えそうだが、ここでは騒動になってしまったので残念ながらその余裕がなかった。

片付けは保育活動の中で生活指導やしつけ的な意味合いで上げられることが多いようだが、環境の特性を知り、それに応じた働きかけを学ぶ学習場面として捉えることも可能であろう。

片付けに関しては、日ごろからいろいろな工夫がなされていると思われる。たとえば、棚にもものが収まった状態の写真を棚の正面に貼ったり、小さいものを収納しやすいように、細かく間仕切りしてある箱を使用するなどである。このような経験が応用できるように

なったり、片付けるものの特性に応じてどのように扱えばよいかを吟味できる時間的な余裕があれば、片付けは、子どもたちにとって、問題解決場面として意味をもつと思われる。

佐々木（2019）は講演の資料中で、片付けの際も、「形の同一性」や用途ごとの仲間分けをすることにより、子どもが形の同一性に気付く感覚を刺激するとともに、物が使いやすい環境となることを紹介している。

#### 4. 幼児教育の「見方・考え方」を保障する環境構成のあり方に関する提言

ここでは取り上げた事例などに基づき、環境構成のあり方を検討したい。

その前に、環境構成全般に関する識者の見解を取り上げる。高山（2017b）は、保育環境を構成する8つの要素を①人、②自然、③物、④情報（刺激の量）、⑤空間、⑥時間、⑦動線、⑧温度・湿度・空気の質としている。さらに、環境構成のポイントとして①子どもの発達に合った環境、②さまざまな興味・関心を引き出す環境、③子どもが主体的に動ける環境の3つあげている。

以下、筆者が事例その他から環境構成のポイントをまとめたものであるが、高山（2017b）と重なる部分も多くみられる。

##### (1) いろいろなことが十分に試せる自由と時間的な余裕

これがすべての活動に共通する大前提となる条件であると思われる。

##### (2) 子どもたちの興味を喚起し、遊びを誘発するような素材などの準備

#### 事例7 ティッシュの箱の製作物

A 幼稚園 2018年9月5日

5歳女児2名が、ティッシュの箱でショ

ルダールバッグを作ったものを、ちょっと得意げな感じで笑顔で筆者に見せてくれた。本人たちも満足した様子である。2人のティシューの箱は、片方が写実的なウサギが大きく載っているもの、もう一人のは全体がきれいな花柄のものであった。肩紐は幅のある布のリボンのようなもので、ストローを短く切ったものを等間隔に貼り付けて飾りにしていた。その後2人は作ったショルダーバッグを、持ち帰る絵本袋にしまいにいった。

4歳児の保育室で子どもたちが帰る用意をしていた時のこと。男児が、ティシューの箱などで作ったカブトムシを手提げ袋に入れていた。角の部分はトイレットペーパーの2本の芯をT字型に貼って作っており、目はペットボトルのキャップが箱の両側面に貼ってあった。また、脚は6本の茶色の折り紙が細く棒状に丸めてあり、箱の下側に貼り付けてあった。

たまたま同じ日に4歳と5歳のティシューの箱を使った製作物を目にするのができた。「資質・能力」で言えば、それまでに培ってきた知識や技能をもとに、表現されたものといえよう。そして、特にバッグは、箱のきれいな柄がバッグづくりを誘発したのではないかと思われる。そういった意味では、用意する素材も、それらを使った子どもの活動を想定しつつ、子どもが魅力を感じたり興味を持つような形状、素材、色、柄など多様なものをを用意することが望ましいといえよう。

### (3) 素材に働きかける多様な道具の準備

高山（2017a）は、「素材に働きかける道具」の重要性を指摘して、それにより遊びが広がることを述べている。

そして、特に砂場で遊びが広がるための環境として、①砂の量が十分な砂場を数カ所に設けるとよいこと、②シンプルな道具をたくさん用意するとよいこと、③草花、水、枝などの自然素材も必要で、④テーブルや棚を砂場空間に取り入れるとよいことなどあげている。③と④は砂場で遊びが他の遊びへと発展するために用意するとよいものである。

幼児教育の「見方・考え方」から言っても、まずは子どもたちが環境に触れて、そこからいろいろなことに気付き、知識や技能を獲得することになる。そのためには、砂遊びに限らず、環境にいろいろな働きかけ方ができる道具が必要となるであろう。

### (4) ①比較して考えることができる、②関連して考えることができる、③検討して考えることができる環境構成

佐々木（2019）は講演の資料の中で、環境構成のポイントとして上の3点を考慮した環境構成のあり方を推奨している。その具体例として、たとえば、プランターの植物にしても、形状の違うものを敢えて並べて植えてるなどして、子どもたちが形状の違いに気付き、そこからさらに発展させられるように工夫を凝らしている。

### (5) 次の活動へ発展することを想定した環境構成

松本（2007）は、砂遊びの持っている一つの特徴として、子どもの気持ちや行動を受け止めることをあげている。前者の子どもの気持ちを受け止めるという点については、たとえば新入園児を受け持つ際に、「砂遊びの魅力が子どもの心を開かせた経験」をあげている。

しかし、松本（2007）がさらに指摘するように、「砂場は自然ではありません。自然物が詰まった、あくまでも人工物です。ですから、自然としての意味合いには限界もあるの



です。(中略)彼らは、より豊かなおもしろさ、不思議などを求めています。それが可能となるのも、半自然ともいべき砂場での遊びがあるからでしょう。砂場は、現代の子どもたちにとって自然への入り口になっているのではないのでしょうか」と述べている。

これは、園の植物や小動物にも言えることである。砂同様、これらも子どもたちにとっては、人工的な遊具やおもちゃ、また素材とは違った魅力がある。現在では、子どもたちの日常的な自然との関わりが不足しているので、努めて保育場面で関わりを深めるよう計画する必要がある。しかし、松本の指摘のように、これもあくまで半自然であるので、教師はその点を自覚し、本来の意味での自然へと子どもたちの経験をつないでいけるよう、計画していく必要があるだろう。

#### (6) 偶発的なものや日常的な身の回りのものを環境として取り込める力

偶発的なことや日常的に身の回りにあるにもかかわらず見落としがちなことにも、案外教育的な価値が潜んでいることがある。教師が計画したことだけではなく、そういうものも保育内容や環境構成として取り込める力が教師には必要であると思われる。

#### (7) 子どもの遊びを見る目

何よりもまず、子どもの遊びを見て、そこにどのような意味があるのか捉える力が教師には必要となるであろう。

次の事例は筆者が観察して記録したものである。

#### 事例8 足こぎ車の遊び

C 幼稚園 3歳児 2018年12月11日

3歳男児2名、女児2名が足こぎ車で中庭のブロックとコンクリートの口の字型

の通路を走っている。子どもたちは慣れた様子で、結構速いスピードで走っている。ブロックの通路を、向こうから直進してきて、角を曲がるとき、スピードにのって、上手にハンドルを切ると、足でこがずに惰性というか勢いで進む感じがおもしろいのではないかということに気付いた。走りとカーブの曲がり方が、熟練のテクニッドだった。子どもたちは何回も何回も繰り返して走っていた。

比較的どこにでも見られる足こぎ車の遊びであるため、うっかりすると見過ごしにしてしまいそうな遊びである。同じことを飽きずに何回も繰り返すことも子どもにはおなじみの行動である。しかし、事例にも書いたように、この遊びのおもしろさの一つはカーブの曲がり方にあったと思われる。この時1回だけの観察であるため、これが子どもたちの間で広まったり受け継がれたのか、あるいは、この遊びを繰り返していると、どの子どももたまたまカーブの走り方の妙味に行きつくのかは不明である。

このように、年齢が低くなれば低くなるほど、単純な遊びが多くなり、大人としてはその遊びのどこが子どもたちにとってのおもしろさがなのか一見したところわかりにくいのではないだろうか。そして、おもしろさの部分に往々にして学びの要素が潜んでいる。

したがって、常日頃から遊びを見る際に、どこが子どもたちのおもしろさにつながっているのかを見極めることが大切である。

#### 5. 幼稚園教育要領、幼稚園教育要領解説にみる環境構成に関連ある記述

ここで改めて、幼稚園教育要領と同解説書の環境構成に関わる部分を取り上げることにする。上の「4」の提言と重なる部分が多い

ことがわかる。

(1)「環境」内容 (2)「生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ」の解説

「幼児は、様々なものに囲まれて生活し、それらに触れたり、確かめたりしながら、その性質や仕組みなどを知っていく。(中略)物の性質や仕組みが分かり始めるとそれを使うことによって一層遊びが面白くなり、物との関わりが深まる。物の性質や仕組みに気付くことと遊びが面白くなることが循環していく。例えば、土の団子作りに興味をもっている幼児は、何度も作りながら、同じ土であっても、湿り気の具合によってその性質が異なることを体験的に理解し、しんにする土、しんの周囲を固める土、湿り気を取るための土など、うまく使い分けている。このように、遊びを通して、物の性質の理解が深まっていく」としている。

(2)「環境」内容の取扱い (1)「幼児が、遊びの中で周囲の環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。また、他の幼児の考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つようにすること」の解説

「教師は、環境の中にあるそれぞれのものの特性を生かし、その環境から幼児の興味や関心を引き出すことができるような状況をつくらなければならない。(中略)

幼児期において、物事の法則性に気付くということは、科学的に正しい法則を発見することを求めることではない。その幼児なりに

規則性を見いだそうとする態度を育てることが大切である」としている。

(3)「表現」内容 (1)「生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ」の解説

「幼児は、生活の中で様々なものから刺激を受け、敏感に反応し、諸感覚を働かせてそのものを素朴に受け止め、気付いて楽しんだり、その中にある面白さや不思議さなどを感じて楽しんだりする。そして、このような体験を繰り返す中で、気付いたり感じたりする感覚が磨かれ、豊かな感性が養われていく」としている。

(4)「表現」内容 (5)「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」の解説

「一つの素材についていろいろな使い方をしたり、あるいは、一つの表現にこだわりのがらいろいろな物を工夫して作ったりする中で、その特性を知り、やがては、それを生かした使い方に気付いていく。このような素材に関わる多様な体験は、表現の幅を広げ、表現する意欲や想像力を育てる上で重要である」としている。

(5) 環境構成の意味としての「状況をつくる」ということ

状況をつくるとは、幼稚園教育要領解説書によると、子どもたちが興味や関心をもって主体的に環境に関わり、発達の必要な経験ができるように、教師が幼児のまわりにある様々なものの教育的価値を考慮しながら、綿密に配慮し、構成した環境をいう。

## まとめ

4.5.を踏まえ、教師の力量も含めた環境構

成のポイントをまとめると以下のようになる。

- ・教師の遊びを見る目。
- ・モノや環境の意味や価値を見い出せる教師の力。
- ・遊びが次に展開、発展できるような教師の側の見通しや計画。
- ・環境に十分関わることができる時間、空間。
- ・子どもが環境に関わる際に用いることができる多様で十分な道具。
- ・比較、関連付ける、検討できるような環境構成のあり方。

砂や泥の遊び、あるいは積み木などにも特有の行為といえるかもしれないが、遊びの中で「壊す」ということについて、松本（1993）も粕谷（2007）も言及している。今回は遊びにおける「壊す」行為について考察できる材料が十分でなかったため、「壊す」行為について取り上げることができなかったが、遊びにとっての意味を今後明らかにしたい。

今回取り上げた遊びは、主に参観により得た活動の様子に焦点を当てて検討を加えたため、考察が偏っていたり、汎用性が低いところもあるかもしれない。その点は、今後取り上げる遊びの範囲を広げて研究にあたっていきたい。

## 〈引用文献〉

- 小川清美 2007 「砂遊びの構造—出合いの種々相」『発達』No.110 53-59頁
- 粕谷亘正 2007 「遊びにおける『壊す』という行動から見えるもの—砂にかかわる子どもの遊びと潜在化された砂の本質」『発達』No.110 82-88頁
- 佐々木晃 2018 『0～5歳児の非認知的能力』チャイルド本社 52-53頁
- 佐々木晃 2019 「保育の力の育ち合いマネジメント」『岡山県私立幼稚園連盟全体教育研修会講演資料』

高山静子 2017a 『環境構成の理論と実践—保育の専門性に基づいて』エイデル研究所 59頁

高山静子 2017b 『学びを支える保育環境づくり』小学館 42-51頁, 76-78頁

松本信吾 1993 「子どもはなぜ砂遊びに魅きつけられるのか」『発達』No.56 48-59頁

松本信吾 2007 「保育者の目がとらえた砂遊び」『発達』No.110 68-74頁

無藤隆 2018 『ここが変わった3法令改訂（定）の要点とこれからの保育』チャイルド本社 27-28頁

文部科学省 2017 『幼稚園教育要領』

文部科学省 2018 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館

## \* 謝辞

保育を参観をさせていただいた幼稚園の皆様、心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。